

IBM 環境シンポジウム 2002

**【セッション B】**

環境商品 / 環境活動

## 「自然資本を活かした地域イノベーション」

いわて銀河系環境ネットワーク 副会長 遠藤 保仁

### (司会)

お待たせいたしました。只今よりセッション B、「自然資本を活かした地域イノベーション」と題しまして、いわて銀河系環境ネットワーク 副会長 遠藤保仁様による講演を始めさせていただきます。

それでは、遠藤様、お願い致します。

ただいま紹介にあずかりました銀河系環境ネットワークの遠藤と申します。

午前中、県知事が岩手の環境について様々なお話をなさっております。

一方県知事も触れておられました。木質バイオマスの有効利用活動、ストーブの例をあげながら県知事は言っていました。岩手は環境首都を目指すということで現在取り組んでおります。

本日はそういう環境を背景にした一つの動きを岩手銀河系ネットワークという団体がございますが、これを通して、活動内容を含めて今後の方向性についてご報告、お知らせしたいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

まず限られた時間ですが、本日のレジメ、目次として、いわて銀河系環境ネットワークとは、ということとシチュエーションを活かした地域イノベーション、この大きく分けて2つの内容について披露させていただきたいと考えています。

まずは、いわて銀河系環境ネットワークとは？

これは名前が「いわて」と入っているなというのがわかると思いますが、銀河系というのはなんだろうという見方もあろうかと思えます。

この銀河系というのは岩手、ご存じの通り宮沢賢治の世界でございまして、そういう思想を背景に名前に取りこませさせていただきました。

設立背景につきましては、この資料にもございますように21世紀の命題で、持続可能な社会。

そして、どうしてなかなか進まないのか、主な理由としてあげていますように技術的な未熟さ、環境ビジネスの低採算性、政策上の不備等など色々な見方があるかと思えますが、個々のアプローチの限界をなんとか打破して、横との連携のもとで岩手を実証地として環境を考えてみようというのが設立の動機でございます。

ちなみに一年前の平成 14 年 6 月 19 日に盛岡で設立させていただいております。

基本的スタンスとして、これもお手元の資料もご覧になりながら見て欲しいのですが、午前中にもよく話ができましたが、産・学・官連携によってシステムの開発を図るということ。

更にもう一つ、岩手は四国と同等の広い面積を持った県です。海あり山ありの県でございます。そういう背景から、分水嶺から沿岸までを一つの流域経済圏として捉えて自然資本の有効活用を図っていこうというものです。

更に地域発意に基づいて、需要者ニーズに即した技術開発、社会システムの形成を図っていこうというものです。

ちなみにこの需要者ニーズもありますが、技術開発云々、実際に銀河系環境ネットワークでは新たな研究といいますよりも、色々な企業が特に有している技術を環境面で提供していただき、それを複合的に組み合わせて、環境と経済の両立を実践しようという目的が一方でございます。

さらに実証事業の実施とありますが、先程触れましたように岩手県の地で研究だけでなく、実証を目的に社会に表して証明しながら地域を変えていこうという気概を持っております。

構成メンバーとしまして、現在会長に東北大学大学院の両角教授、そして私、副会長を務めさせていただいている遠藤でございます。

というふうに事務局、運営委員からなっております。会員は名実とも産・学・官、民間企業（個人 7、団体 21）法人名で登録している企業ということでございます。

行政関係 30。行政というのは、横断的に岩手県庁をはじめ、地方振興局のメンバーが個人参加しております。

更に学術研究、大学関係ですが、水産分野から林産分野まで、更に会長自身が地域経済を専門としておりますので、色々な分野の先生たちの力を借りながら、ひとつ新しい枠組みを作っていこうということをやっております。

したがって現在会員数としては 47 名、そして団体会員数 23 名、約 70 名前後の規模で活動しております。

これが組織の構成ですが、先程申しあげました運営委員会の下に技術支援委員会。

これは様々な環境の分野で、例えばこの前実践したものでバイオマストイレというのがありまして、微生物等を使っていくわけですが、そういう技術の裏付けを取っていこうというものもありますし、またそれを伸ばして支援していく分科会があり、これは主に研究者が集まっていますが、そういう組織を委員会で一つ持っています。

更にナチュラル・キャピタリズム制作企画委員会。これも大学の各分野の先生たちで構成してございまして、その下に分科会というものを持っています。この分科会が実は企業連携の集まりでございまして、各分野の企業がそれぞれの分科会に所属しています。

ちなみに企業と言いましたが、この中のメンバーには森林組合も入っておりますし、海洋分

野の方も入っております。

まずこれから説明していきますが、現在6つの分科会を持ってそれぞれ活動しております。ひとつは森林再生の分野、これが午前中に知事が触れておりました木質バイオマス有効利用分科会。

ただし、ここでいう木質バイオマスというのは、エネルギーのみならず、ひとつのマテリアルとして木質資源を見て、それを環境分野に活用していこうという分科会でございます。

もちろんエネルギーも捉えていきますが、例えば身近では木炭、炭化です。木質を改質して炭化という状態にもって行って、それを水の浄化や河川浄化に活用するシステムを作っていく。例えば、住宅以外の分野に対しても森林資源の活用を図っていこうということです。

ですからペレットという言葉が知事からありましたが、ペレットのみならず、林地残材を活用したチップ、間伐材の活用、これを環境分野に色々な形に組み合わせ、経済効果を高めながら使っていこうということをやっている分科会でございます。

次に流域浄化分科会。これは分水嶺から沿岸までというお話をしましたが、分水嶺はイメージ通り森林、沿岸までとは岩手県の場合、陸中海岸を持ってありますが、これは全部川で繋がっています。そこで森林再生イコール水の浄化だという言い方も出来るのですが、そういう水をキーにして様々な流域に点在する、色々な問題を捉えて解決していこうと言うものです。次の3番目の次世代エコファーム分科会。これは言葉で大体イメージがわかると思いますが、岩手は畜産県でもあり、一方ではやはり水、環境、色々な面が繋がっていきます。

そういう意味で牧場、葛巻町というところも人口が約9000人で牛が約12000頭という牛の方が多い地域ですが、そこで発生している糞尿の活用の問題、堆肥の問題、色々な問題があります。

それらを資源と見て、回収、活用して行き、更にリサイクルを描く形で地域に活かしていこうということなど、現在色々な知恵を絞って活動しております。

4番目の次世代廃棄物処理分科会。これも知事が午前中に青森と岩手の県境、約88万立方の廃棄物があるということで、岩手、秋田、青森と、現在連携を取ってやっていますが、そういう分野、解決方法を考えていこうというのが第4の次世代廃棄物処理分科会です。

5番目の環境資材分科会。これは実際に岩手県の工業技術センターを中心に活動していて、例えば一つの例としてあげますが、今、日本全国、木炭が水の浄化や様々なマイナスイオンに非常に良い、ところが木炭が産業となっていない。どうして産業になっていないかと言いますと、数値性能の評価が還元できないという盲点がございます。

これを何とかイメージするのは、間伐材を炭化という活用方法とした場合、炭化すること、途中でガスが出て、またエネルギーになるのですが、そういう炭化物を環境分野で使いやすい状態に加工していこうという開発部門がこの環境資材分科会です。

例えばチップを炭化して、それをボードにして、それをさらに硬度を高めて海中林の育成基盤材にもっていかうとか、色々な各分科会の活動に対して提供、研究開発していく分野がこの環境資材分科会です。

次に6番目、沿岸環境・漁業システム分科会とありますが、これは一番新しい分科会です。森林から出発しますと言ったのですが、海洋分野、特に陸中海岸は養殖等いろいろございまして、一方で磯やけの問題等も発生している。この原因も一つは、やはり流域の水の汚染が問題じゃないかという方もいらっしゃいますし、家庭排水の問題も確かにございますが、まずは沿岸部を整備しよう、環境をよくしよう、いい環境はそのまま維持しよう、こういう我々の実証を通じて数値化しながら証明していこうという分科会でございます。これにはやはり海洋学の先生や海に関する技術を持った企業が参加しております。

この分科会関連物質フローとありますが、今話したような中味をイラスト化しています。

左上に森林再生分科会があります、そして木質バイオマスという言葉があるように、未活用の森林資源とか、未利用の森林資源とっておりますが、未だ利用されずに山に放置されている資源をいろんな組み合わせで、農業の分野、畜産の分野との組み合わせによって活用していくものです。

最後に先程説明した環境資材分科会が中心にございまして、これが今いった沿岸の分野、廃棄物の分野、有機浄化の分野、次世代エコファームの分野を結びつけてるフローでございます。

昨年の6月19日に設立しましたというお話をしましたが、昨年度の活動実績、まだ産声をあげて間もないですが、実績内容がこの図でございます。

研究会というのは原則1ヶ月に1度、それこそ北海道やら関西からも集まりますが、盛岡で開催しております。その間に運営委員会を8回、更に広い岩手の中をキャラバンにも時間を使っております。

キャラバンも原則として意思決定権を持つ町村長との面談等を通し、様々な地域の問題点を明らかにしながら一緒に考えて、提案しているということでございます。

固有名詞としては葛巻町、胆沢町 NEDO 関係の活動の支援とありますが、葛巻町や胆沢町と一緒に進んでいるのですが、実際の研究としての NEDO の資金導入を果たしながら、進めております。

更にこれも研究会活動の一環でしたが、青森・岩手県境産廃不法投棄現場視察会。

現在、岩手では一般の方たちの申し込みは受けない状況になっております。

国会議員の方たちが来るなら別ですが、一度現地を見て提案をしようという背景がありまして、個々ではちょっと無理ですが、いわて銀河系環境ネットワークという活動の一環だということで、視察会を実施しております。

最近のニュースですが、戦略的創造研究推進事業というのがございまして、これは科学技術振興事業団の公募事業、全国約2000件あまりの公募がありました。

ここで全国から選ばれたのが3件、この3件の中に、いわて銀河系環境ネットワークのコンセプトが採択され、設立1年少々にしてここまできたということで、会員にとっては非常に励みに思っている採択でございます。

これらをステップにして今後岩手で更に実施に早く近づけるために活動していくことにな

ります。

ちなみに「いわて発循環型流域経済圏の構想に関する研究」という研究課題になっています。

地域循環型社会の構築とか色々な言葉が現在ございますが、経済と環境を一体化させて地域に貢献できる仕組みを模索していこうということになっております。

これらが昨年の実績でございます。

次に自然資本を活かした地域イノベーション。

これは一つ例として皆さんご存じの現在の農業の問題を論じたときに色々な問題が出てきますが、岩手の場合も含めて、現在農村はどんなのだろうといった場合に、また今年は冷夏で更にひどい状態ですが、一次産業の衰退、自然資本の不適切な利用・管理、まさに森林の放棄とあって良いぐらいの現状がございます。

切り捨て間伐。間伐をしなければ森は元気になりません。では間伐を強制的にしていきたいと思いますといっても、間伐というのは太陽の光がどんどん木に当たるように隙間を作っているのですが、ところが間伐した木が活用されないということで、山に捨てられています。

これが俗に切り捨て間伐という言葉になっていますが、このように山にはまだまだバイオマス資源がたくさん放置されている。

結局原因は何かというと、現在日本国内での木材の使用量の約8割、82%が海外から入ってきています。木材が輸入されています。したがって日本の山の動きがどんどん低下している。

もう一つは農村もそうですが、林業界においても後継者の問題がある。

現在木を切って働いてくれている人たちはどんどん老齢化していく。岩手でもある村では平均年齢が70才にもなっている。年は平等にとっていきますので、5年後、10年後は悲惨な状況が待っています。

これは統計からもはっきりしますが、このままでは農村は経済、環境両面から八方塞がりになってしまいます。これは農村という言葉を経済に置き換えてもまさに同じ内容になっております。

その中で新規環境ビジネスを創出していこう、そして地域経済の活性化を果たしていこう、特に地域経済の活性化というのは、こういう分野に限らず現在低迷している山間地域においては非常に重要な事業になっております。

ですから銀河系環境ネットワークでお邪魔したところの町村長も、何故膝を乗り出してくるのかというと、やはり地域経済の問題が一番大きい問題として現在ある。地域経済イコール雇用問題もある。そういう捉え方で環境ということを追いつきに、地域を変えようという動きを現在岩手の各町村でやっております。

次にあの自然資本の適切管理、生活環境の改善。これも話していると、木質バイオマスの活動と非常にダブっていくのですが、地域の資源を活用して生活の中に取り入れ、そして生活を改善していこうという組織づくりをしていこうということで、共通しているのは、縦型行政では出来ないということが背景にあります。

従って、産、学、官の中で産業界においては、当然異業種の連携が組織されなければ今話しているような分野には進んでいけないと考えております。

この地域イノベーションの3つのカギというのは、何度もふれていますように、産・学・官の連携です。

ちなみにある方は、これからは産・学・官の連携プラス、マスコミと金融機関だと、あと2つを付け加えることがあります。

まさしく岩手で木質バイオマスエネルギーの推進を現在やっているのですが、いざ事業化をやって地域でいよいよ動き出した場合には、やはり啓蒙の面ではマスコミ、資金面の理解では民間、金融機関と、それだけ揃わなければきついのかなと感じることが時々ございます。ですから要は横との関係です。

次に地域需要に応じた地域間の連携。これも色々な見方がありますが、例えばひとつの地域、皆さんも各々の田舎とかに住んでいるところをイメージすれば良いのですが、地域といった場合には森林あり、川あり、そしてもちろん沿岸部は海あり、その中で色々な産業構成があり、畜産が盛んなところ、例えば岩手ですと北はプロイラーが盛んで、プロイラーの糞の活用、処理、処分ですが、これは非常に問題がある。

点で頑張ってもどうしようもならないようなところが現在いろいろありますが、例えば林業分野と畜産分野の連携、畜産分野と農業分野の連携、様々な異種産業内での連携を果たした中で進めていきたい。

次に新しい経済圏の創造と市場経済圏との関連付け。読んで字の如しですが、その中に新しい経済圏をつくっていききたいということでございます。

すべてにおいてのキーワードはあると思うのですが、産・学・官。10年前とかのバブルの絶頂の時にも産・学・官はありました。異業種交流会という話もよくあって、名刺交換会とかいろいろありましたが、現在色々な意味で岩手で同じ目的を共有した中での企業種連携、ターゲットが決まったの異業種連携、そのような形になりつつあります。

これには、いわて銀河系環境ネットワークのほかに岩手ではINSというのがございます。これは岩手大学の工学部を中心に同じような動きをしております。

そういう色々な地域内での、色々な形の人も含めた中で結集を果たして、地域の将来を考えながら枠組みを創築していこうということでございます。

これが地域需要に応じた地域の連携。

先程もこれに関した図が出てきましたが、やはり原点にあるのは地域。地域の中には森林があってそれこそ居住区もあって、またそれぞれ色々な問題が内包されてあるわけですが、それらを縦型、分野ごとではなく、地域とした中で連携、関連させながら一つの新しいこれからの

システムをつくっていかうとしています。

その為には色々な分野の融合化も必要ですし、一つの共有したビジョンも必要だというふうに認識して現在動いております。

たとえばこれは岩手県の地図です。

今の時間、別の会場で葛巻町町長の中村さんが「日本一の新エネルギー基地を目指して」ということで元気な話をしていると思いますが、その葛巻町が実施しているのが岩手の県木。この葛巻町では銀河系として畜糞のメタンストックシステムを提案しています。これは地域の産業構造を背景として現在進めております。

NEDOの採択を受けて、現在銀河系のメンバーも足を運んで葛巻町の皆さんと一緒にやっています。もちろん地域の森林組合も一緒に次に進もうとしています。

次は東和町があり、あと住田町、大船渡市と胆沢町でそれぞれに応じて検討を加えて、いろいろ提案を行いながら現在進めています。

例えばこの大船渡市というのは海をもっております。そして住田町は今月、来月に、木質バイオマスエネルギーの工場が建設予定のところでございます。森林の町と言われています。

この住田町とは川で結ばれているのですが、下に行くと大船渡湾、「森は海の恋人」の標語で有名な広田湾、かきの養殖をしているのです。

町単位、村単位も当然必要な事ですが、それを一つの流域として見て繋げて一つの環境の新しい枠を模索してみようというのが、この図でございます。

この他にもまた、足を運んでいるいろんな地域があります。ですからその地域ごとにプランニングしながら、また実施まで持っていこうというのが現在行われている銀河系の活動内容でございます。

これは個々じゃ出来ない内容がいっぱいあると思います。仮にA・B・Cとなっておりますが、これをこの地域として見た場合に、一つの経済圏としてもものを有機的に繋げていこうではないか、各々での活動が非常に難しい局部があっても、連携していくことによって地域に経済が出来るんじゃないかと思えます。

「環境」については、総論賛成だけでも、経済と一致しないという話が3、4年前にはよくありました。

今はその環境を一つの経済的裏付けも足して枠組みも変えていけば出来るという指向になっております。それをまず、こういう組み合わせかた、この連携の仕方、これをやった場合にこうなるということを岩手の各地域で実証していきたいと考えております。

これも似たような図ですが、例えばこのメタンストックシステムです。牛の世界、牧場の世界では非常に困った問題が起きてます。糞尿の処理の問題、これが水にも影響しているし、地域の環境にも影響している。ただ牛は生き物ですし、一定量の糞尿を排出する。それを一つの

やっかい物だという見方ではなくて、一つの資源として活用していこうじゃないかという見方がこれです。

よくバイオマスニッポンの中にも言葉が出てくるのですが、メタン発酵させて使っていくことです。

メタン発酵させるということまで、一つの区になっていますが、これを森林バイオマスと繋ぎあわせて同時に活用していこうじゃないかと。これは農業分野だけですと出来ない話です。

例えば森林、行政ではこういう分野の組み合わせというのは出てきません。それを何度もいのように地域として見た場合にはこの組み合わせは可能だという図です。

そしてメタン発酵してその残った液肥を、これまた地域に還元していこうと。

更にここで言いたいのは、メタン発酵してメタンガスが出る。このガスを木質の改質ということに使います。

炭化するときの熱源にして、メタンガスを炭に置き換えるということです。

これは低コスト地域分散型でやっていける。

これに更に今度は炭化物に対しての付加価値を当然付けていくわけです。

ケースバイケースではありますが、色々な提案をしながら地域を変えていく、これは縦型行政では絶対出てこない話です。

簡単そうに見えますが、色々な国の研究所、研究センターでもこういう発想は出てきません。

あくまで縦型の中で考えますので、それが地域として連携、横の連携で見ていくとこういう組み合わせが出てくる。これは自然な考え方ではないかなと思っております。

これも同じようなものですが、メタンガスが地域をどう変えるか、地域の住民にどう地域の資源を供給していくかというシステム、やはり最終的には地域経済、住んでいる人があって、はじめて経済がありますので、地域還元するシステムです。

よく風力の話が葛巻町でもしますが、町民の側から見るとイメージが変わって観光になるのはいいですが、風力をやって自分たちの生活の何が変わるのかというのが、冗談話も含めてあります。

これは実は他の町でもいろいろと出てきます。確かにその通りですが、こういう方式でいくと本当に地域で事業所も含めてその地域に住んでいる人、その生活までデメリットを出しているながら地域資源を体感できる構造ができるのではないかと。

もちろんここには、当然コストを念頭に入れながら、より資源を活用して、自分たちがメリットを受けるとというのが大前提になっています。

このメタン発酵設備はこれだけの技術開発、例えばコージュネという、木材チップのガス化という世界をとっても一緒ですが、それだけ単体で現在色々な企業がやられています。

それをこの地域経済の中で考えていきたいと。そうすると餅は餅屋ですから、色々な技術を持った企業に参加いただいて、地域でもってシステムを証明していこうと考えております。

これは先ほど大船渡のことに触れましたが、別の組み合わせです。

森林があります。木質バイオマス、要は森林資源ですが、これはやはり同じように炭化します。

ここでいう炭化というのは工業炭化です。

更にそれを川、エコ護岸ということで使って、システムを決めていき、それを今度は人工魚礁に、この世界にも商品開発が入りますが、使っていきましょう。そして、それによって地域のメリットを出していきましょうと。

山から海までをこの様に繋げていきましょうという一つの例です。

諸々のお話を致しましたけども、いわて銀河系環境ネットワークからの提言。

持続可能な社会の創造は地域イノベーションからはじまる。

2番目に自然資本を活かした地域イノベーションは地域社会再生のチャンスである。

3番目に地域イノベーションのカギは3つの連携。

これは前段にも述べさせていただきましたが、産・学・官とか地域と経済圏。これは岩手だけの話ではありません。各県同じ方向に今後行かろうと思っております。

ただ幸い岩手県の場合は新エネルギーを使い、いろんな世界で着手して、県民の環境に対する意識は徐々にではありますが、変わってきている。従ってこういう活動を起こした場合には、非常に地域での協力が得やすい環境になっているのも現在の背景になっております。

これが将来展開イメージ。ちょっと字が小さいものですから、お手元の資料を参考にしながら見て欲しいのですが、何度も分水嶺から沿岸までという話をしました。

これは一つの町をイメージすればよいのですが、皆様の各県のイメージでもいいです。

みんな繋がっているわけです。よく21世紀は水の時代だという論議も一方でされていますが、あと農業の時代だとか。知事の増田さんも自給率の話をしていましたけども、すべて何をするにも結局は水がキーだったのです。

バックしていくと将来まで水が保証されるのかという話になっていきます。今度は水を司っている主な要因の一つが、この森林整備の枠にでてくるわけです。

そうすると将来大丈夫なのか？といわれた場合に、残念ながら森林整備の面では日本は非常に林野庁をはじめ疲弊といいますが、活力がない。荒れ放題で壊滅に近づいている。これが今の現状です。

そして当然、何故という事になりますが、国内ではどんどん外国の木を輸入して使って国内の物は使わない。ではどうすればいいのか。

単純な話で、間伐材も含めて国内の資源は国内で活用できるようなシステムをつくる。その為には国の林野庁だけでなく木材界、林業界も当然変わらなければいけない。しかし、なかなか変わらないというジレンマがあります。

例えば出口を見つけようといった場合に、バイオ炭化ペレットとか木質炭化ペレットとありますが、現在岩手でエネルギーとして使うという木質バイオマスの動きの位置付けがここにあります。

ただし森林資源とは燃やすだけではない、エネルギーだけではない、もっと様々な形にマテリアルで使っていけるのではないかと、付加価値を求めていこうという動きが一方にあります。

これが今回ふれた第5分科会の環境資材分科会という位置付けとなってくるのですが、これまでに日本の林業行政は非常に住宅産業向けの林業行政で進んできました。

新聞等で耳に入っているかもしれませんが、これから必要なのはこの住宅産業向けがすべてではなくて、総合利用型の林業形態、森林形態にもっていかなければならない。

それは誰がやるのかというと、色々な人で知恵を絞って、我々業界もそうですが、皆で新しい社会を構築していく。その結果、山がきれいになり、保水能力も高まり、それこそ元気になればCO<sub>2</sub>吸収も当然効果が出てくるわけですから、すべてにとっていいこと尽くめであります。

当然水もきれいになってきて、沿岸部、海の世界まで全部共通していく。何よりも生活水である水が保証されていくという流れになっていくはずです。

理屈を言っているかもしれない話ですが、それを何とか産業に結びつけながら、経済効果を基に利用しながら組み合わせたい。重複しますが、この畜産の世界は、農林水産業の中でもこの分野の人が一番ここでよくやってる。しかし、各分野が縦型行政のなかでしか論議されていない。それを繋げて地域を見ていく。何度も同じ事を言っていますが、地域連携という横の連携システムを作りながら、この地域を変えていき、その中でまた新しい産業も作って、雇用も作っていく。必ず雇用は出てきます。

森林資源は省庁でいくと林野庁、大きくすると農水ですが、農水でも水産分野とか、畜産分野とかも、みんな霞ヶ関にいても、皆さんご存じの通り縦型、隣の課が何をやっているのかわからない。

ひとつの例ですが、製材所があると木の皮が出て何の役にも立たないというのであれば、その皮を加工してファイバー状にして、今度は畜産の方に持っていくわけです。

そして畜産のほうでは、おがくずに変えて、(バークと言っておりますが)木の皮を使い出した。そしてそこで使い終わった堆肥、循肥、これが今度はバーク堆肥工場に持っていかれて、そこで今度はバーク堆肥として緑化に使われていく、そういう循環が岩手では県北の一部で行われています。

これも結果とすれば、全部縦型を破った横との連携の資源循環型が確立されたということもいえるのかなと思っております。

都市部から見ますと、緑もただで、水も豊富で、田舎はいいなという感じに見えるでしょうが、実はその基盤が現在ぐらついている。そして年齢というのは皆さん平等にとっていきます。ですから農業の就労人口の予測、5年後、10年後をシュミレーションしたら真っ青になるような問題も抱えています。

それを今こういう環境の時代を背景にして、岩手でなんとか岩手型のシステムを色々な人たちが集まって実施をしていこうとしているのが、いわて銀河系環境ネットワークという組織でございます。

これを更に形にすることによって、岩手の県民の人たちの理解を得ながら地域の変えていきたと考えています。

私の立場は当然市民ですから、そういう新しい枠組みの中で岩手の林業界も新しい組織に生まれ変わっていかねばならないという形で参加しております。

ですから、岩手の森林再生は、やはり異業種交流というか、色々な人に知恵を借りながら行っていかなければ、これからは活動していけない。

今までは林業という生業のなかでの凝集という位置付けだったのですが、これから一つの環境のシステムのなかでの位置付けで物を見ていきたいと考えております。

様々な業種の方が本日もいらっしゃると思いますが、環境というのは木質バイオマスもそうですが、アフターファイブの時間はすべて共有問題になっています。

職業が何であれ、公務員であれ、研究者であれ、アフターファイブは一県民、一国民ということで地域の住民の一人とした場合に、こういう環境をいろんな人の力を集めながら、組み合わせていきたいと考えます。

これは川崎とか、横浜とか、色々な動きがありますが、それはその地域に合わせた動きが必ずあると思っております。

ですから今日の話は、あくまでも森林県岩手と畜産県岩手、そして三陸海岸を持つ岩手。今の木質バイオマスの増田知事を中心とした動きも含め、そういう動きの中からいわて銀河系環境ネットワークが更に環境県岩手の推進力になっていけるのではないかなという思いを持ちながら現在活動しております。

そろそろ時間ですので、以上でお話を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。